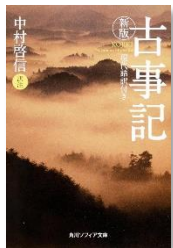




『古事記』

倉野憲司校注 岩波書店／岩波文庫

本館	請求記号：X/080/I95Y/Koj	資料ID：700668288
神田分館	請求記号：X/080/I95Y/Koj	資料ID：700120488



『古事記 現代語訳付き』

中村啓信訳注 角川学芸出版／角川ソフィア文庫

本館	請求記号：X/080/Ka14/Koj	資料ID：701849168
Knowledge Base	請求記号：/913.2/Ko39	資料ID：701849028

経済学部教授 新田 滋

『古事記』は「日本」と「天皇」が成立した8世紀初頭に、その前史を天皇中心の神話、伝承、歴史として纏めたものである。それでも古代日本人の心に思い描かれた世界を窺い知ることのできる貴重な本である。編纂過程や編著者の稗田阿礼や太安万侶には不明な点も多いそうだが『日本書紀』に比べてコンパクトかつ文学性が高い。とりわけ倭建命（『日本書紀』では日本武尊）の説話は文学作品として名高い。

戦前・戦中には日本神話がそのまま史実として教えられていた。そのため戦後しばらくの間は日本神話は国民の常識であり「神武景気」、「岩戸景気」、「いざなぎ景気」といった経済用語も普通に通用したほどであった。だが戦後になるとそうした皇国史観は排斥され、神話や歴史というものは時の権力者の都合のよいように編纂されるものだという視点から読むことができるようになった。『古事記』と『日本書紀』の記述のズレからは編纂当時の権力者が何を隠したかったのか等々を巡り、古代史は史料の絶対量が限られていることもあって、素人的な謎解きを秘かに楽しむこともできる。

『古事記』は文学書としても謎解きの書としても面白く読めるし、国家生成論、歴史学、神話学、民俗学など実に様々な切り口から読むこともできる。奈良や九州などを観光旅行する際には「聖地巡礼」の種本にもなる。むろん神道の原典としても読むこともでき、何度でも様々な読み方ができる本である。